慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『新トルキスタン』誌におけるゼキ・ヴェリディ・トガンの文化観とその背景
Sub Title	Zeki Velidi Togan's concept of Turkestani culture and its background : focusing on the Türkistan Millî Birliği's organ journal Yeni Türkistan
Author	小野, 亮介(Ono, Ryosuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	2015
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.84, No.1/2/3/4 (2015. 4) ,p.181(181)- 209(209)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設125年記念号(第1分冊) 論文 東洋史
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20150400-0181

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『新トルキスタン』誌におけるゼキ・ヴェリディ・トガンの文化観とその背景

小野亮介

はじめに

ゼキ・ヴェリディ・トガン（一八九〇‐一九七〇）は二〇世紀を代表するトルコ学研究者として、またロシア革命以降におけるロシア・ムスリムの自治独立運動を指導した革命家として著名である。[1] 彼は今なお重要な研究対象としてみなされ、その祖国バシコルトスタン（現在はロシア連邦内の自治共和国）を中心とする旧ソ連圏やトルコを中心に、新たな研究が世に出され続けている。[2] バシキール人研究者のマルスィリ・ファルフシャートフによると、これまでトガンに関して出版された文献の数は実に一三〇〇点を超えるという。[3]

特に近年ではサラヴァト・イスハーコフ、[4] ファルフシャートフ[5]のように、文書館資料や私蔵文書を利用して一九二〇年代後半以降のトルコやヨーロッパにおけるトガンの活動を明らかにしようとする試みが目を引く。自身もウズベク人移民であるアハト・アンディジャンは、関係者から受け継いだ豊富なムスタファ・チョカイ（一八九〇‐一九四一）[6] 関連資料を駆使し、トガンら亡命知識人の活動について浩瀚な研究を著した。[7] また小松久男は、様々な原因に由来する中央アジアのディアスポラを彼らの自称である「ムハージル」としてまとめ、トガンを含む個々の事例やソ連側の対応を紹介している。[8]

筆者はトルコ亡命（一九二五）以降におけるトガンの活動とその思想的展開に関心を抱いているが、①アヤズ・イスハキー（一八七八‐一九五四）[9] ら亡命タタール人との対立、②亡命組織「トルキスタン民族同盟 Türkistan Millî Birliği: TMB」の同志であったが、そ

の後裔を分かったチョカイら亡命トルキスタン人との対立、③一九三〇年代初頭のトルコで成立した公定歴史学「トルコ史テーゼ」への反発、④クーデタ未遂容疑で不当に逮捕された「人種主義・トゥラン主義裁判事件」（一九四四-四五）を主要な分岐点として挙げることができる。

前述した研究の進展にも関わらず、一九二五年からの約一〇年間におけるトガンが充分に検討されてきたとは言い難い。筆者は政治家および研究者としての両側面からアプローチしなければならないことを指摘したが[10]、従来の研究はＴＭＢ機関誌『新トルキスタン』の内容にまでは踏み込んでおらず、従ってトルコ史研究者としてのトガンとその学知に支えられたトルキスタン概念が等閑に付されてきた。そこで本稿では『新トルキスタン』を主な分析対象とし、さらに上記①の視点を交えつつ、彼の民族主義思想の根幹となるトルキスタン文化観とその背景について考察することを目指す。

一　ＴＭＢの成立と『新トルキスタン』誌の創刊

（一）ＴＭＢ概略史

本章ではトルキスタン民族同盟（以下、ＴＭＢと表記）の成立と『新トルキスタン』誌刊行に至る過程を、ロシア革命後におけるトガンの活動と共に確認しておきたい。

ＴＭＢはもともと、十月革命後に成立しトガンが首班を務めたバシキール自治政府[11]、同様にカザフスタン東部に成立した自治政権アラシュ・オルダおよびフェルガナ地方に成立し、初会合時には既に赤軍によって倒されていた旧トルキスタン自治政府（コーカンド自治体）の三者による同盟構想に端を発する（一九一八年夏）。一九一九年にバシキール自治政府やアラシュ・オルダはボリシェビキ側へ付き、翌年の会合でＴＭＢはソビエトや第三インターナショナルとの協調を模索するが、同時に反ソ闘争の組織化にも着手する。そしてレーニンとの関係破綻によって、トガンは同年末にブハラへ逃れた。一九二一年初頭に独立、民族軍、世俗主義など七か条の共通綱領を定めたＴＭＢは、この年の夏にトガンを最高指導者に選出し、次いで二四か条の綱領や民族旗を制定した。ＴＭＢは主に、トガンらが旗あげた社会主義的「エルク党」と民族主義的「ジャディード進歩主義者党」から構成され、それぞれが独自の綱領を有していた。同時にト

ガンはブハラ・サマルカンド地域で反ソ・ゲリラ運動であるバスマチ運動を指揮した。かつてオスマン帝国の最高権力者であったエンヴェル・パシャ（一八八一－一九二二）も身を投じたこの運動は現地のソビエト権力を脅かしたが、ポーランド・ソビエト戦争の終結やエンヴェルの戦死などを経て、戦況はソビエト側に有利に推移した。そのためＴＭＢは、トルキスタンでは最後となる第七回会議（一九二二年九月）で連邦制を再確認するとともに、トガンをロシア国外へ送り出し、トルキスタン問題を国際社会に訴えることを決議している。[12]

かくしてトガンは一九二三年末にパリへ至り、二か月後にはベルリンに拠点を移した。彼は先んじてパリに亡命していたチョカイ、自身と同様バスマチ運動に身を投じ、トルコに逃れた元ブハラ共和国大統領オスマン・ホジャ（一八七八－一九六八：コジャオール）らとともにＴＭＢの再編に着手し、改めて中央委員長に選出される（第一回ベルリン会議：一九二四年一一月）。一九二五年五月にトガンのトルコ帰化が決まると、ＴＭＢは第二回ベルリン会議で本部をトルコへ移転し、チョカイをヨーロッパ代表に指名するとともに、機関誌を発行することを確認した。[13]

（二）プロメテ連盟への加盟

このようにＴＭＢは亡命地での再出発を果たしたが、機関誌発行の手段を見出せずにいた。当初トガンやチョカイらは、メフメト・エミーン・レスールザーデ（一八八四－一九五五）[14]率いるアゼルバイジャン亡命運動の機関誌『新コーカサス』（一九二三年創刊、イスタンブル）にひとまずの拠り所を求めていた。[15]チョカイは一九二七年二月のＴＭＢハイデルベルク会合において同誌への合流を提案するが、翌月のイスタンブル会議でＴＭＢは構想を更に進め、独自の機関誌発行を決議している。アンディジャンは、それまで休眠状態にあったＴＭＢが内部対立の可能性をはらみながらも、このイスタンブル会議で最終的な形態をとり、一九四〇年代までその構造が保たれたことを重視している。[16]

ＴＭＢが機関誌発行に踏み切った最大の要因は、ポーランドの庇護によって組織されたプロメテ連盟の働き掛けである。概要に触れる前に、まず研究状況について確認しておきたい。ポーランド語文献を除き、プロメテ連盟、より広義には一九一八年に端を発するプロメテ運動に関する文献の蓄積は豊富とは言い難い。[17]関連する地域・民族のうち最も重要なのは、連盟理事長を長らく務

めた言語学者ロマン・スマルストツキ（一八九三‐一九六九）自身をはじめとするウクライナ側からの研究である。[18] 特に中東欧史を専門とするティモシー・スナイダーは、画家であり、当時ポーランド領であったウクライナ人地域の知事を務めたヘンリク・ユゼフスキ（一八九二‐一九八一）に焦点を当て、プロメテ運動とポーランド国内におけるウクライナ人マイノリティとの関係を論じている。[19] プロメテ運動は日本の対ソ政策とも無縁ではない。反ソ亡命者の活用を模索していた参謀本部は一九三三年以降プロメテ運動に接近し、その過程で連盟に批判的な北コーカサス亡命運動指導者ハイダル・バンマト（一八九〇‐一九六五）と深い関係を築いた。[20] 一方、連盟にも紙幅を割いたアンディジャン以前のトルコでは、フランス人研究者エティエンヌ・コポーによる概論[21]や関係者の回想[22]などに関連文献が限られていた。本節ではアンディジャンの研究に沿って、連盟の概要について確認したい。

一九二六年五月にポーランド第二共和政の父ユゼフ・ピウスツキ（一八六七‐一九三五）が軍事クーデタによって独裁政権を樹立すると、ソビエト支配下の被抑圧民族（当初はウクライナ、アゼルバイジャン、グルジア、北コーカサス）およびポーランド人の糾合を目的としてプロメテ連盟理事会がワルシャワで結成された。[23] 連盟はパリでフランス語機関誌『プロメテ』（同年一一月創刊）を発行するとともに、加盟する各亡命組織に対しても物質的に支援した。駐モスクワ・ポーランド大使館が入手した各地方の新聞雑誌や統計資料などのソ連刊行物が連盟を介して提供され、加盟組織はそれらの情報をもとに機関誌を発行した。[24] さらに連盟と連動してワルシャワには東方研究所が設立され、言語研究や加盟組織の活動家たちによる講演などが活発になされた。[25] その機関誌『東方』に掲載された一連の記事は、プロメテ運動の歴史的背景や両大戦間期という時代の特殊性を伝えるものである。[26]

『回想録』によれば、一九二四年六月にはステンポフスキなる人物がベルリン滞在中のトガンに接近し、連盟の結成と機関誌発行の構想を伝えている。申し出を有望視したトガンはパリのチョカイを呼び寄せ、この運動に参加するよう説き伏せた。[27] アンディジャンはこの接触をトガンの記憶違いとしているが、スナイダーは問題の人物がプロメテ運動の活動家であり、随筆家としても著名なイェジー・ステンポフスキ（一八九三‐一九六九）で

あることを、ポーランド語資料を使って立証している。[28]

アンディジャンによれば、TMBがポーランド側と接触を深めるのは一九二六年夏のことであった。連盟の統括を担い、後にポーランド外務省東洋局長を務めたタデウシュ・ホウフコ（一八八九－一九三一）[29]はトルコを訪れ、機関誌発行と連盟による資金供与を持ちかけており、トガンもこのことを前向きにチョカイに伝えている。[30]

TMBは先述の一九二七年三月イスタンブル会議直後からプロメテへの加盟に着手し、折衝にはチョカイらが当たった。その結果、『プロメテ』第八号（同年六－七月）よりキャプションにトルキスタンが加えられ、TMBは九月に正式加盟を果たした。[31]そしてピウスツキが私財を投じた連盟の活動資金「ピウスツキ資金」から年間約一〇〇〇ドル、当時のレートで二〇〇〇トルコ・リラに相当する資金を供与されたTMBはいよいよ機関誌を創刊することとなった。[32]

（三）『新トルキスタン』誌概要

TMB機関誌『新トルキスタン *Yeni Türkistan*（以下、YTと表記）』は一九二七年六月にイスタンブルにおいて創刊された。誌名の由来については次節で検討すると

して、本節では同誌の概要を見てゆきたい。

YTの発行部数は創刊時に五〇〇部であったが、その後七五〇－一〇〇〇部を推移した。[33]トルキスタン問題を国際社会に訴えるという第七回TMB会議の方針からすれば、ヨーロッパ、中東に散在するトルキスタン人亡命者だけでなく、プロメテ連盟に加盟するアゼルバイジャンなどトルコ系の亡命組織関係者やトルコ国内の知識人たちも主な読者層として想定される。そのため序文にもあるように、各記事は原則としてアラビア文字トルコ語で表記された。他方、現在のウズベク語やカザフ語に近いトルキスタン方言は韻文やニュース欄において用いられている。[34]YTではトガンやチョカイらTMBのメンバーがトルキスタンの政治経済問題や文化史などを論じているが、当事者の手記などバスマチ運動に関する重要な記録を数多く掲載している点も同誌の特徴である。

またトガンの論文からは、ソ連側がYTを警戒していたことも伺える。[35]論文⑪（次章表1参照）によれば、党中央アジア局書記イサーク・ゼレーンスキィ（一八九〇－一九三八）、ウズベク共産党第一書記ウラジミール・イワノーフ（一八九三－一九三八）、彼らの「通訳 tilmoch（Uz.）」たるウズベク共和国首班ファイズッラ・

ホジャエフ（一八九六-一九三八）ら現地幹部は、独占的にYTを閲覧した。そして掲載論文を改竄しつつ党機関紙に引用し、トガンらを汎トルコ主義者、イギリス植民地主義の走狗として非難している。[36]

こうした事情もあり、ソ連およびその友好国であるトルコ政府を過度に刺激することを避けるため、YTの表紙や本文では非合法組織であるTMBとの関係が明示されず、多くの記事で筆名が用いられた。[37]特にこの年の一月にダーリュルフュヌーン（現在のイスタンブル大学）助教授に就任していたトガンの場合、公務員の政治参加を禁止する当時の公務員法第九条に抵触していたため、時事・外交問題に関する論文においては「ソクルカイオール」および「スヤル・グル」という筆名が用いられている。[38]

YTは亡命者研究においても重要な位置を占めている。例えばロシア・ムスリム亡命者の出版物を網羅的に整理したローウェル・ベザニスは、多少の事実誤認を含みながらも、YTをトルキスタン亡命者の定期刊行物の中で最重要のものであるとし、記事や情報源の質を高く評価している。[39]なお二〇〇五年にはアンディジャンらによって現代トルコ語訳による選集が出版されたが、同書はソクルカイオールをチョカイに比定するなど原文の誤読・誤解が少なくなく、利用には注意が必要である。[40]

（四）誌名と「民族・共和国境界画定」

誌名のうち、民族の活力と再生を想起させる「新」という単語は先述の『新コーカサス』誌に範を取ったとも考えられるが、創刊当時既にソ連では公的に廃止されていた「トルキスタン」という地域名を掲げている点で重要である。政治領域としてのトルキスタン概念の帝政期からロシア革命期にかけての変遷については帯谷知可が要を得てまとめているが、[41]本稿では創刊の辞で語られる誌名の由来を見よう。

「帝政期の概念としてであれ、国という意味での利用が今日ロシアで禁じられている「トルキスタン」という言葉は、東西トルキスタン、カザフスタン、トルクメニスタンなどをも包摂する名称として本誌の題名となった。そしてこの正しく、自然的な境界とともに、「トルキスタン」の「新し」さも近代的な意味での民族的独立の獲得という形でのみ想起されるものである。このため「新トルキスタン」という言葉によって、我々が追求する目的の舞台、境界、

特徴が決定されたのである」[42]

引用文中で仄めかされている「民族・共和国境界画定」政策（一九二四－二五）は、トガンとともに国家連合を構想したカザフ人トゥラル・ルスクロフ（一八九四－一九三八）が一九二〇年に、既存のトルキスタン共和国を「テュルク・ソビエト共和国」へ、トルキスタン共産党を「テュルク諸民族共産党」へそれぞれ改称するよう求めたことに対し、これを退けたレーニンが共和国の境界画定を指示したことに端を発している。当初は連邦案も優勢であったが、結局ブハラ、ホラズム、トルキスタン共和国の解体によって、ウズベク、カザフ、トルクメン、キルギス、タジクすなわち現在の中央アジアの政治体制の原型となる五共和国（自治共和国を含む）が創設され、政治的領域としてのトルキスタンは消失した。小松はこの政策の影響の大きさに鑑み、中央アジアにおける「第二の革命」と評している。[43]また確定作業に関する一次資料を博捜したアーネ・ハウゲンは、分割統治を前提とする従来の分析が妥当ではないことを指摘する。むしろそれは、小集団の寄せ集まりをいかにまとめ、効率よく統治するかという観点から理解されるべきであり、党中央と現地代表者らとの交渉や妥協の産物であったという。[44]また近年では熊倉潤が、「民族・共和国境界画定」とその後の変遷をアルヒーフ資料から追い、ソ連を「民族自決の帝国」と位置付けている。それによれば、経済統合や連邦制の構想を退け、民族共和国の建設を志向したのはホジャエフ、アブドゥッラ・ラヒムバエフ（一八九六－一九三八）、スルタンベク・ホジャノフ（一八九四－一九三八）ら現地の政治エリートであった。加えて熊倉は、各共和国の人口、特に党政治エリートにおいて基幹民族が占める比率を丹念に整理し、「民族・共和国境界確定」によって中央アジアに成立した自治共和国が連邦構成共和国へ昇格した背景を考察している。[45]

しかしトガンら亡命者は当然こうした党内の複雑な事情を把握できず、彼らの目にこの政策が分割統治として映ったのは無理からぬことであったろう。ＴＭＢは前述の第一回ベルリン会議においてこの問題を討議した際に、境界画定が帝国主義的分割統治であることを批判し、「トルキスタン」という呼称の使用継続を確認している。[46]特に、新たに共和国を与えられたウズベク人・トルクメン人らが、この会議の議事録では「小民族や諸部族 küçük millet ve kabileler」として言及されることに注意したい。トガンはＹＴの諸論文でこの「部族」という

語をしばしば批判的に取り上げることになる。さらに議事録では、トルキスタンという名称の廃止・利用禁止は、この語が却ってトルコ系諸民族、ひいてはロシア・ムスリムの統合・団結を象徴することに繋がると述べられている。[47]

またトガンは、一九二六年一二月にＴＭＢの同志へ宛てた書簡においても、機関誌の誌名に「トルキスタン」を充てるべきことを述べている。書簡中の「トルキスタンとは、囚われのトルコ人の住む地の謂いである。西トルキスタンには旧［トルキスタン総督府］五州、ヒヴァ、ブハラ、トルクメン、アフガン・トルキスタン［アフガニスタン北部の平原地帯］、カザフスタンが入る。東トルキスタンには中国領トルキスタン［新疆］、カシュガル、ジュンガリアが入る」という見解からは、境界画定によって生まれた「中央アジア Средняя Азия」[48]の領域をはるかに超える統合理念を見出すことができよう。[49]このようにＴＭＢやトガンは、「民族・共和国境界画定」を奇貨としてソビエトとの対決姿勢を打ち出し、独立と統合[50]の理念を誌名に託したのである。

二　『新トルキスタン』誌におけるトガンの文化史論

（一）ＹＴにおけるトガン

本章ではＹＴにおけるトガンのトルキスタン文化観を考察するが、まず彼の論文について概観したい。創刊以来ＹＴの編集長を務めたトガンは、ほぼ毎号に渡って論文を執筆した。先行研究や筆者の調査により、少なくとも二十一点が彼の筆によるものであると確認されている（表1）。[51]

そのうち、創刊号の巻頭論文を飾った総論（論文①・⑬）、ロシア人入植者問題と絡めた農業・貿易開発論（同⑥・⑭）など、全作品のほぼ半分がトルキスタンの政治・経済に関する時事論文である。これらの論文はプロメテ連盟から提供された現地定期刊行物や統計資料を活用したものであり、彼の鋭いボリシェビキ批判は興味深い。しかしその後の歴史的展開やソ連による経済開発の結果として、その多くはやがて意義を失ってしまう。

またテリー・マーチンの唱える「アファーマティヴ・アクションの帝国」としてソ連を捉えるならば、トルキスタンを含むソ連東方は必ずしも抑圧された地域とは言

表1 『新トルキスタン』誌におけるトガン論文一覧

No.	年	月	号	原題	原題日本語訳	ページ数	署名	備考
①	1927	6	1	Türkistan Meselesi	トルキスタン問題	7	Sokıkayoğlu	巻頭論文 独・仏・ペルシャ語訳有り
②	1927	6	1	Şaybak Han'ın Şürleri	シャイバク・ハンの詩	4	Ahmet Zeki Velidi	
③	1927	7-8	2-3	Bolşeviklerin Şark ve Müstemleke Siyaseti	ボリシェビキの東方・植民地政策	5	Suyar Gul	王曾善が漢語に翻訳
④	1927	7-8	2-3	Türkistan ve İdil Havzası'nın Medenî Münasebetleri Tarihinden	トルキスタンとイディル流域との文明関係の歴史について	6	Ahmet Zeki Velidi	
⑤	1927	7-8	2-3	Şüun-ı Siyasi	政治問題	2~	無署名	「アタテュルクのイスタンブル来訪」以外の部分もトガンが執筆？
⑥	1927	9	4	Türkistan'ın İktisadıyatında Yerli ve Rus Nokta-i Nazarları ve Aris-Semey Hattı	トルキスタン経済における現地人とロシア人の観点ならびにアリス－セメイ線	7	Ahmet Zeki Velidi	
⑦	1927	9	4	Mösyö (Le Coq)'un Yeni Eseri	ル＝コック氏の新著	2	A. Z. V.	ル＝コック『中央アジアの芸術・文化史に関する図録』(1925)、『中央アジア秘宝発掘記』(1926) の書評
⑧	1927	10-11	5-6	Türkistan İstiklâl Hareketine karşı Buhara Emiri	トルキスタン独立運動に対峙するブハラ・アミール	7	Sokıkayoğlu	巻頭論文
⑨	1927	10-11	5-6	Qozoqlikda Yozgan Xotimdan	流浪する我	1	Başkurt Suyar Gul	トルキスタン方語表記
⑩	1927	10-11	5-6	Türkistan İsmi, Hududu ve Mesahası hakkında	トルキスタンの名称、境界、領域について	7	Ahmet Zeki Velidi	巻頭論文 Zeki Velidi Togan, *Türk-Türkistan*, İstanbul, 1960 として再刊
⑪	1927	12	7	Yeni Türkistan ve Ruslar	『新トルキスタン』とロシア人	7	無署名	巻頭論文
⑫	1927	12	7	Şarkî Türkistan'da Kadim Küçalıların Medeniyeti	東トルキスタンにおける古代クチャ人の文明	10	Ahmet Zeki Velidi	
⑬	1927	12	7	Türkistan Meselesi	トルキスタン問題	8	Sokıkayoğlu	別冊付録・①の増補
⑭	1928	3	8	Rus Muhaceret Siyasetinin Yeni Devresi Muvacehesinde Türkistanlıların Vazifesi	ロシア人移民政策の新時代に直面するトルキスタン人の使命	7	Sokıkayoğlu	巻頭論文
⑮	1928	3	8	Alahazret Emanullah Han'ın Avrupa Seyahati	アマーヌッラー・ハン陛下の欧州周遊	5	Suyar Gul	
⑯	1928	4	9	Türkistan'da Askerlik Meselesi	トルキスタン兵役問題	6	無署名	巻頭論文
⑰	1928	5-6-7	10-11-12	Türk Dünyasında Elifba Meselesi	トルコ世界のアルファベット問題	18	Ahmet Zeki Velidi	別冊付録
⑱	1928	11	16	Kazakbay'a Cevap	カザクバイへの返答	7	無署名	巻頭論文
⑲	1928	11	16	18-19uncu Asır Türk Siyasî Hayatına ait İki Eser: Kırımlı İbrahim ibn Ali ve Hindistanlı Mir İzzetullah'ın Eserleri	18-19 世紀トルコ人の政治活動に関する 2 作品：クリミア人イブラヒム・イブン・アリー、インド人ミール・イッゼトゥッラーの作品	7	Ahmet Zeki Velidi	
⑳	1928	11	16	Türkistan ve Azerbaycan'ı Öğrenme Derneği	トルキスタン・アゼルバイジャン研究協会	4	無署名	会則を含む
㉑	1930	2	27	Mevlâna Beqa'î	メウラーナ・ベカイー	4	Ahmet Zeki Validi	ラテン文字表記

トガンが筆者である可能性が高い論文

a	1927	9	4	Birleşen Üç	団結した三者	3	無署名	巻頭論文

Tuncer Baykara, *Zeki Velidî Togan*, Ankara, 1989 などを基に作成

えない。マーチンはソ連政府が大国排外主義を抑制し積極的格差是正措置（アファーマティヴ・アクション）を取ることによって、非ロシア人大衆の不信感を払拭し、自身を身近なものに感じさせようと努めたことを強調する。そのため教育・産業・行政の分野で非ロシア人を優遇するコレニザーツィヤ（現地化）が推進され、またカザフ共和国ではロシア人入植者を追い出そうとする脱植民地政策が採られ、ウズベク共和国に至っては「民族・共和国境界画定」によって頻発した民族紛争を指導レベルが操作し「食い物にした」と評されるほどであった[52]。こうしたマーチンの議論と対比させると、ボリシェビキによる抑圧を強調するトガンの論文はその統治の一側面を扱っているに過ぎないという印象を拭えない。

以上を踏まえ、本稿ではトガンの全論文のうち残りの半分、トルキスタン文化史に関する作品に注目したい。YTでの文化史研究は二〇世紀を代表するトルコ学者フアト・キョプリュリュ（一八九〇－一九六六）によって水準の高さを認められるが、そのほとんどがトガンによる論文であった（論文②、④、⑦、⑫）[53]。このように大半の亡命者には見られない歴史学者としての側面は、トガンの民族主義思想の根幹をなすものとしても無視しえない。

（二）詩を通じた文化・宗教観

論文②でトガンは、一五世紀末・一六世紀初にティムール朝を滅ぼし自身の王朝を開いたシャイバク・ハン（ムハンマド・シャイバーニー・ハン）の詩集（ディーヴァーン）（Topkapı Müzesi, 3. Ahmet, Nr. 2436）から当時の文化的特徴を論じている。トガンは、トルキスタンのトルコ化、換言すれば遊牧ウズベク人をはじめとするトルコ系諸部族の文明化・定住化を完成させた人物であり、「トルキスタンへの貢献は大きい」としてシャイバクを評価している[54]。ペルシャ語の伝統を受け継ぐ同時代のチャガタイ詩人とは異なり、シャイバクの詩には日常生活を扱う俗的な作品が多かった。しかしトガンは純トルコ語による彼の詩を「トルコ的」として肯定的に受け止め、民族文化にふさわしい指標として創刊号に掲げたのである[55]。

トガンがこの論文で注目するのはシャイバクとその周辺が礼拝と断食の実践を除き、イスラム的規範よりもトルコ的慣習トレ töre を重視した点であった[56]。その内容は食事や婚姻、戦利品など多岐に渡るが、とりわけトガンはシャイバクの詩を引用しながら、ワインや蜂蜜酒バ

ルが日常的に飲用されていたことに着目している。後者についてトガンは「蜂蜜から作られて、ワインと同じくらいに強く、酩酊させる「バル酒」はこうした「慣習を重視する」シャイフたちによって全くもってムバーフ（可不可なし）、さらにはハラールとすら解釈された」と述べ、バル酒がシャイバク周辺の宗教エリートに受容されていたことを指摘している[57]。また「バルもて浄められよ、酒姫（サーキー）よバルの他に望みがあろうか」[vk. 65a, 5-6][58]や同様の詩句[vk. 65b, 11-12]のように、詩集では酒を促す句が見られ、さらにバルによる酩酊は礼拝を妨げるものではないと理解されていた[59]。

バル酒はトガン本人にとっても馴染み深いものであった。彼の父は村のムッラーであったが、自身の妻つまりトガンの母が密かにバル酒を造り飲用しても咎めはしなかった、とトガンは少年時代を回想している[60]。このように慣習がイスラム的規範に優先されることはトガン自身にとっても日常的光景であり、そのことが詩中でのバル酒愛飲への注目に結びついたと言えよう。

詩集には馬乳酒クムズを醸す革袋サバへの言及[vk. 119b, 5]も見られる。このことからトガンはクムズの飲用を指摘している[61]。クムズは古来より北方遊牧民の飲料[62]として知られ、トガンも自身やその周囲による日常的飲用を回想している[63]。トガンにとってクムズもまた民族文化の象徴であり、シャイバクの詩に自身の環境、慣習との連続性を見出したのである[64]。

以上の飲酒の例からシャイバクによる慣習重視の姿勢を確認できるが、それを支えたのはヤサヴィー系のスーフィズム信仰であった。「聖者らの長となりしはトルキスタンの王、地表を照らすはトルキスタンの月」[vk. 69b, 12-13]、「聖者らの長となりしはホージャ・アフマド・ヤサヴィー」[vk. 175a, 5]などの句のように、シル河中流域の都市トルキスタン（別名ヤス）を根拠地とし、中央アジアを代表する教団を築いた十二世紀の神秘主義者アフマド・ヤサヴィーを称えるシャイバクの詩にトガンは注目している。彼の詩においてヤスは信仰の要であり、「この［トルコ的］見地からすれば、トルキスタン［ヤス］の水は［メッカの聖泉］ザムザムに、トルコ人の聖者たちは預言者たちに等しい」[65]というトガンの指摘は、遊牧勢力にとって経済的・軍事的・宗教的重要性を帯びていたこの地域を足掛かりとして勃興したシャイバーニーが、この地域の小城であるアルクークをもって預言者ムハンマドにとってのメディナと同等視したと

する堀川徹の論考とも合致する。[66] 付言すれば「シャイバーニーはチンギス家より神命を買い受し」[vk. 119b, 11] のように、こうした神秘主義への傾倒はチンギス裔たる誇りと密接に結びついていた。[67]

クムズやバルと同様、このヤサヴィー的スーフィズムもまたトガンの出身背景と重なる。前章で述べたように、ボリシェビキと決別したトガンは中央アジアへ逃れるが、その途上ホラズム地方でハキーム・アタ廟を訪れている（一九二〇年一〇月）。ハキーム・アタはヤサヴィーの高弟の一人であり、トガンによれば彼に仮託された『バーキルガーンの書（ハキーム・アタの書）』は、イディル（ヴォルガ）河沿岸地域の中心地であるカザンで一八五七年に出版されて以来初等教育の場で教科書として用い続けられた。[68] トガン自身もそれらの詩を覚えており、廟の壁に二篇の詩を書きつけている。[69]

以上のように、トガンはシャイバク・ハンの詩からトルコ文化の特徴を見出しているが、論文②ではサマルカンドやヘラートで花開き、同時代のもう一人の主人公とも言えるバーブルが受け継いだティムール朝文化についてはほとんど注意を払っていない。トガンは「彼はこのような馬鹿馬鹿しい、厚かましい、邪教徒的な多くの言動に及んだ」[70] というバーブルのシャイバク批判を挙げているが、彼によればバーブルのイスラム観は都市的で、科学・哲学により近いナクシュバンディーヤのそれであり、シャーマニズムやトルコ的伝統と混交したシャイバク的なスーフィズムの在り方が逸脱と受け止められるのは当然のことであった。[71] 後年ナヴァーイーやバーイスングルに関する小論を著すように、トガンもティムール朝文化に無関心だったわけではない。[72] しかし彼は、同時代のトルコ人が自身の文明を蔑ろとすることに危機感を抱き、研究の題材として慣習やフォークロアなどを重視するよう一九二〇年代当時から訴えていたのである。[73]

これに関し、ごく最近に再発見されたトガン発アタテュルク宛書簡（一九三五年八月二五日付）は彼が抱え研究者としてのジレンマを物語っている。ウィーン大学で博士号を取得したトガンはドイツに移り、アラブ地理学の研究を続けていた。しかしこの書簡において彼は、その重要性にも関わらず、研究を重ねるにつれトルコ人の生活から遠ざかってしまう実感を吐露している。総じてヨーロッパの東洋学者たちが文献学や民族誌学の観点からトルコ文化に関心を抱いているのに対し、トガンにとってそこには民族的生活の総体が求められねばならな

かったのである。[74] こうした文化観の乖離に対する危惧からは、民族文化は何よりも生活に根差したものでなければならないとトガンが考えていたことが伺える。これこそが、トガンがバーブルの批判を意に介さず、慣習に基づく日常生活の風景を見出せるシャイバクの詩に価値を認めた要因と言えるだろう。

（三）ムハンマド・アミーンとの文化的交流

論文②の続編である論文④は、トルキスタンとイディル河沿岸地域との文化的交流を論じた作品であり、トガンの文化観を考察する上で有益である。本節ではシャイバクと同時代のカザン・ハンであるムハンマド・アミーンに注目したい。

ムハンマド・アミーンはモスクワ大公イヴァン三世の庇護下に育ち、異母兄との争いの末にハン位に就いた。廃位と復辟（一四八四-八五、一四八七-九五）を繰り返した彼は一五〇二年に三度目の即位を果たす。しかし一五〇五年に突如として宗主イヴァンに反旗を翻し、その後継者ヴァシーリー三世とも抗争を繰り広げた。中でも蜂起直後のニジニ・ノヴゴロド襲撃や、翌年のカザンにおけるモスクワ軍撃退は有名である（一五〇七年に和解）。[75] トガン自身もロシア内外で好評を博した処女作『トルコ人とタタール人の歴史』（一九一二）においてムハンマド・アミーンの即位の経緯やモスクワ大公国との攻防を叙述するが、蜂起の要因を王妃や側近に求めるなど、ハンとしての素質自体はそれほど評価していなかった。[76]

ところが論文④でのムハンマド・アミーンへの評価は一転して高い。トガンは冒頭で、遊牧民の移動やマーワラーアンナフル出身者による入植、支配者層におけるパトロン・クライアント関係などを通じ、既に一六世紀以前よりイディル地域とトルキスタンとの間で言語的・文化的一体性が醸成されていたことを指摘する。[77] そしてその典型として、ムハンマド・アミーンとシャイバクとの間に見られる緊密な文化的交友を述べてゆくのである。

トガンは「イスラムの長に王冠あれ／汝の友に日夜神の称えあれ／［聞けり：論文④では脱落］ロシア人の不信仰者を破りしと／我が子よ、汝に聖戦士たる祝福あれ」［vk. 183a, 9-10］というシャイバクの四行詩を引用する。トガンによれば、この詩こそ上述のムハンマド・アミーンによるニジニ・ノヴゴロド襲撃を指すものに他ならない。そしてムハンマド・アミーンに対する親密な

呼びかけから、シャイバクがイディル地域に特別の関心を払っていたとトガンは解釈した[78]。

のみならずシャイバクはムハンマド・アミーンの要請に応じ、一五一二年にヘラートの宮廷作曲家グラーム・シャーディーを贈っている。この人物の生涯は詳らかでないが、一五世紀最大のペルシャ音楽家アブドゥルカーディル・マラーギーに師事したことが知られている[79]。「当時、彼ほどにサウト［メロディーの一種］や歌曲を作曲できるものはいなかった」[80]とバーブルも認めた稀代の音楽家をシャイバクが送り出したことそれ自体、彼がイディル地域を重視した証左と言えよう。

バーブルはグラーム・シャーディーのその後の消息に接しなかったが、トガンはそれを補う史料として、ファフリー・ハラヴィーの編纂によるペルシャ語詩人伝『スルタンたちの庭園』（一五二三）を挙げている。前章で述べたように、トルキスタン脱出後のトガンはパリへ至るが、彼はわずかな滞在の合間に国立図書館でアラビア語・ペルシャ語写本を調査していた[81]。論文④でトガンはこの時調査したと思われる同書の写本（BnF, Supplément Persan, No. 320）から、グラーム・シャーディーを贈られた際にシャイバクへ敬意を表してムハンマド・アミーンが詠んだとされる以下のペルシャ語詩を引用している。

「庭にあるスイセンの茎は黄金の冠［バラ］の重みに酔いしれ／黄金の冠は世捨てのダルヴィーシュの頭を痛めつける」

ハラヴィーがダルヴィーシュとしての多才さや優雅さを称えるように、この詩における「世捨てのダルヴィーシュ darvish-e ṣāheb-e tark」とは、ムハンマド・アミーンその人であるとトガンは指摘した。そしてこの神秘主義的な自己表現から、ムハンマド・アミーンとシャイバクとの王権観の共通性を見出したのであった。さらにトガンは「無比の bī-naẓīr」というハラヴィーの賛辞に注目し、この詩がヘラートや北インド境域においても好評を博したことを読み取る。かくして彼は、当時のカザンがマーワラーアンナフルのみならず、ヘラートとも文化的に緊密な関係にあったことを導き出したのであった[82]。

前述のように、『トルコ人とタタール人の歴史』でのムハンマド・アミーンに対するトガンの評価は低く、そもそも文人君主としての側面には全く触れていない。従って論文④における高評価はまさに大転換と呼べるも

のである。本節で取り上げたシャイバクとの文化的交友という文脈からこの人物を再評価しようとするトガンの理解は、「恐らくカザン史の最も光輝な時代はこの人「ムハンマド・アミーン」の時代である。彼の名は、政治的活動によっても文明的活動によっても中央アジアで知られていた」[83]という記述に端的に表れている。

ムハンマド・アミーンとシャイバクとの間に見られる文化的交友は明らかに高尚な部類に属し、前節で検討した生活に根差すトルコ文化とは本来相容れないはずである。トガンがYTにおいてこの矛盾をどう消化したかはなお検討の余地があるが、一九三二年の論文ではティムールを例に後者を優先させている[84]。ひとまず本稿では、これらの文化的諸相がイディル沿岸地域とトルキスタンとの媒介として作用したことをトガンが重視した点を指摘するにとどめたい。

三　イディル・ウラル派との対立とその背景

（一）「独立タタール文明」への拒絶

前章ではYTにおける二篇の論文、特にシャイバク・ハンの詩集を題材として、トガンの文化観を考察した。端的にいうとそれは、地域や時代の差を超え、自身の経験とも重なる文化的共通性にトルキスタンの特徴を求めたものであった。本章ではこうした普遍性と対峙する特殊性へのトガンの反応とその背景について考察する。

トガンは論文④でムハンマド・アミーン-シャイバク間の交流を称えた後、こうした交流が徐々に力を失う様子を追っている[85]。一八世紀後半以降におけるロシア移民の進出とそれに伴うロシア文化の台頭、トルキスタン文化の衰退[86]などの諸条件のもと、イディル地域には「小部族の文章語 ufak kabile edebî lisanları」の誕生する環境が整った。かくしてタタール方言が文章語の地位を獲得しはじめ、「独立タタール文明 müstakil Tatar medeniyeti」が登場したとトガンは批判する。この文明は一九世紀末以来、カザフ草原・シベリアとロシアとの間でタタール商人が担った中継交易の繁栄によって支えられ、拡大していった[87]。しかし鉄道網の拡大により、二〇世紀初頭にロシアやヨーロッパの資本がアジア市場へ直接流れ込むようになると、その基盤は失われ、「独立タタール文明」は地域的な存在へ転落していったとされる[88]。そして「イディル・トルコ人たちも歴史的な道へ再帰し、再びトルキスタン・トルコ人の文明活動の一員となる必要を理解するだろう。諸事件はムハンマド・ア

ミーン・ハンとシャイバク・ハンとの方針が非常に正しいことを如実に物語っているに違いないのである」と締めくくり、トルキスタン文明への歴史的回帰を訴えたのである。[89]

このように論文④の終盤からは、トルキスタンとの紐帯を放棄しないよう、タタール人に対しトガンが釘を刺していることが伺えよう。このような分離志向に対する警戒感は、論文①・⑬にも見られる。この中でトガンは、ボリシェビキによる分割統治によって地域的な「部族方言」が公用語となり、トルキスタンの共通文章語は葬り去られようとしていると警鐘を鳴らしている。[90]実はトガンはYTにおいて「文明」と「文化」を混用する傾向にあるが、口語としての「方言 şive/lehçe」と文章語としての「言語 lisan」はかなり厳密に区別している。この使い分けは論文①の仏・独語訳にも反映されており、部族レベルの前者がその上位にある後者に取って代わることを拒絶するトガンの意識の表れとして無視しえない。[91]

第一章で確認したように、もともとTMBは連邦国家制を掲げた組織である。実際トガンはトルキスタンの定義を試みた論文⑩において、一九一八年夏の連邦構想を振り返っている。それは現在のカザフスタン西部にバシコルトスタン東南部を加えた西カザフ管区 okpyr、カザフスタン東部に相当する東カザフ管区、旧トルキスタン総督府の領域に旧ブハラ・ヒヴァ両ハン国を加えたタシュケント管区から構成されるものであった。[92]三管区がそれぞれ、バシキール自治政府、アラシュ・オルダ、そしてチョカイが首班を務めたトルキスタン自治政府を叩き台としていることは論を俟たない。このように「独立タタール文明」の存在が、文化的一体性や連邦制構想を脅かすものとしてトガンに認識されたことは明白だろう。

（二）書簡に見る対立

ではこの批判は具体的に誰へ向けられたものであろうか。この問題に対し有益な史料は、トガン自身を含む亡命者らの書簡である。書簡の意義については既に前稿で述べたが、その一つに内部対立の事情が挙げられる。[93]

トガンがYTで露わにしたタタール人への対抗意識について、彼と並ぶTMBの実力者であったチョカイは興味深い指摘をしている。一九二八年初頭以来トガンと対立を深めていた[94]チョカイは、プロメテ連盟関係者や他地域の指導的亡命者たちと頻繁に書簡を交わし、トガン批判を繰り広げている。両者の関係悪化については別の機

会に検討するとして、本節では関係する書簡をとりあげたい。

チョカイはレスールザーデに宛てた長編の書簡（一九二九年二月二七日付）で、トガンとイディル・ウラル運動を指導したイスハキーとの対立に触れ、以下のように述べている。

「ザッキ・ベイはこの［イディル・ウラル－クリミア共同］戦線に反対しています。なぜなら彼はタタール人を信用していないからです（略）ザッキ・ベイの議論は以下の通りです。①一九一八年にタタール人たちは参謀本部アジア局の組織化を支持しましたが、ザッキ・ベイと彼の支持者たちはこれに反対でした。（②略）③タタール人たちは一般に「チャガタイ文化」を認めず、トルコ世界における真の民族文化は三つあるのみだと述べています、彼らタタール人、小アジア・トルコ人、アゼルバイジャン人です。（④略）⑤タタール人たちは「バスマチ運動」を民族運動とは見なしません[95]」

トガンがチョカイ自身に宛てた書簡から引用したというこの指摘は、前者のタタール人に対する意識を物語っている。⑤がＴＭＢの形成過程を否定するものであることは明らかであるが、より根本的な問題は③である（①は後述）。前章で述べたように、ＹＴにおいてトガンが重視したのは純トルコ語や日常生活上のトルコ的な慣習に基づき、イディル沿岸地域をも内包する文化であった。しかしチョカイの指摘からは、「トルキスタン（チャガタイ）対タタール」という文化的ヘゲモニー争いをトガンが強く意識していたことが伺える。

約一か月後（一九二九年四月五日）にプロメテ連盟と関係の深かった駐パリ・ポーランド武官ヴォジミエシュ・ドンブロフスキ（一八九二－一九四二）に宛てた書簡でも、チョカイはトガンによる対立の扇動を非難している。チョカイは前述の五点を再び挙げるが、トガンが頑なに反タタール的態度を維持し続けたことに問題が深刻化した原因を求めた[96]。さらにチョカイによるトガン批判は、イスハキー派のタタール人オマル・テレグロフ（一八八四－一九三八）に宛てた書簡（一九二九年三月七日付）でも取り上げられている。前述のレスールザーデ宛書簡を引用したこの書簡でチョカイは、「彼［トガン］の活動や振る舞いはあらゆる視点から見て非難すべきものです」、「イスタンブルでザッキ・ヴァリードフ［トガン］は、偽造や捏造に至るまでのどんな汚らわし

い手段をも憚らずに、我々の団結の紛うことなき崩壊に向けて活動しております」と述べつつ、トガンとの決別、さらにはイディル・ウラル派との相互承認を表明したのであった。[97] この方針に基づき、トガンが組織を去った（事実上の追放）一九二九年五月にチョカイらＴＭＢメンバーはベルリンでイスハキーと会談し、トルキスタン、イディル・ウラル、クリミア各亡命組織による共通戦線の形成に合意するに至った。[98]

（三）トガンはトルキスタン人か

両者の接近はトガンにとって痛手であった。彼はＴＭＢを離脱して間もなく、プロメテ連盟を統括するホウフコに宛てて以下のように申し立てている（一九二九年六月一五日）。

「チョカエフ［チョカイ］は、所謂ウラル・ヴォルガ国家の承認（略）に基づいてタタール人たちのうちアヤズ・イスハキー派とあからさまに接近したのですが、これはつまるところバシキリア［バシコルトスタン］をトルキスタン連邦の構成から除外し、それを（当のバシキール人の意思に反して）カザン・タターリア［タタールスタン］に帰属させることに基づくことと同義であります」[99]

これまで本稿では、トガンがタタール人（文化）によるトルキスタン（文化）からの離脱を強く批判したことに焦点を当ててきた。ところが右の引用文は逆に、バシキール人自身がトルキスタンから除外される憂き目にあったことを示している。これはバシキール人がトルキスタン連邦の構成単位となりうるか、換言すればトガンはトルキスタン人たりうるか否かという問題に読み替えることができる。

皮肉なことに、そもそもトガンがＴＭＢ指導者に選出された経緯自体が彼を部外者とみなす根拠となりうる。第一章で触れたように、一九二〇年末にブハラへ逃れたトガンはこの地でＴＭＢの組織化を進めた。翌年七月にＴＭＢは中央委員長選出に取りかかるが、地域・民族間の不和やブハラ人内部の対立のため候補者を絞りきれなかった。やむなく第三者の仲介によって、トガンが中央委員長の座に就いた。[100] つまり誰にとっても等しく部外者に当たることこそが、ウズベク・タジク知識人の結束の欠如と相まって、トガンの選出につながったと考えられるのである。事実トガンは亡命したベルリンにおいて、「ＴＭＢのトップがバシキール人であることはウズベク

人の不名誉である」というイスハキー派の流言に直面する[101]。このようにバシキール人という彼の出自は、ＴＭＢ指導者としての正当性に疑問を投げかけるものであった。

以上を踏まえると、第二章で論じたトガンの文化観は単なる自身の研究成果の披露にとどまるものではないという結論に達する。その真意は第一に、イスハキーらイディル・ウラル派との文化的ヘゲモニー争いにおいてトルキスタンの文化的一体性を強調すること、第二に、その一体性に自身の経験やムハンマド・アミーンの事例を結び付けることによって、イディル・ウラル地域／バシキール人・タタール人をトルキスタン／トルキスタン人という地域的・民族的概念に組み込むことに求められよう。

（四）文化自治への反対

ＴＭＢを離脱したトガンはその後独自の活動を模索するが、一九三二年に開催された第一回トルコ歴史学大会において「トルコ史テーゼ」を批判したため、ウィーンへ去らざるを得なくなった。彼は自身に向けられた批判に応じるべく『一七の砂中都市とサドリ・マクスーディー・ベイ』（一九三四：以下、『砂中都市』と表記）を著している。同書の主な論点のうち、大会会期中に突如表明したダーリュルフュヌーン辞任を巡る経緯や、イディル・ウラル派の主要人物であり、「トルコ史テーゼ」形成の一端を担ったサドリ・マクスーディー（一八七九－一九五七）によるテキストの歪曲については前稿で論じた[102]。本節では残った最後の論点であるイディル・ウラル派との対立に注目することによって、本稿が考察してきた諸問題の背景を明らかにしたい。

『砂中都市』でトガンはまずロシア革命当時を振り返る。トガンやアゼルバイジャン、トルキスタンの知識人たちは全ロシア・ムスリム大会（一九一七年五月・モスクワ）などの政治集会で民族別による領土的自治に基づく連邦国家制を主張した。これに対しイスハキーらタタール人が主張したのが、ロシア・ムスリムはロシア国家に留まり、文化的自治のみを享受すべきという単一主義である[103]。『砂中都市』によれば、後者の主張は民族生活の核を宗教と言語との保持に求め、帝政期の制度を引き継ぐウファ宗務評議会や革命後に組織された民族管理局（代表はマクスーディー）がロシア全土のムスリムの文化自治を指導するというものであった。こうした文化自治論は、政治的には中央集権的単一国家への参加を意

味するため、バシキール人が領域自治を志向することは、明確な「反乱」とみなされたとトガンは批判している。[104]

トガンはタタール・ヘゲモニストの妨害によってバシコルトスタン自治運動が絶えず阻害されたことを幾度も例証している。その一つが、前々節のレスールザーデ宛書簡の中で①として挙げられた民族軍の編成に関する問題である。トガンは一九一八年六月よりバシキール軍を再編して、アラシュ・オルダ政府のカザフ軍との間で合同司令部の設置を試みた。これに対しイスハキー一派は同年九月にウファで催されていた白系臨時政府合同会議Уфимское государственное совещание に接近し、両軍をそのアジア部として従属させ、自身らは軍ムフティーとして移管後の部隊で影響力を確保しようとした。その際トガンらの説得に当たったイスハキー派のタタール人将校は「一種のウクライナを作り出そうとしている」と当時ロシアの支配を脱していたウクライナになぞらえ、トガンを分離主義者として批判している。かくして合同司令部の試みは水泡に帰したのであった。[105]

この事件が象徴するように、トガンの批判は、イディル・ウラル派が常にバシキール人やカザフ人、トルキスタン人らに対し影響力を行使しようとすることに向けられている。[106] 彼はイスハキーの論文を引きつつ、文化的自治への不参加が民族的背信とされる一方、領域自治の獲得がタタール文明の分裂と見なされることを見抜いていた。[107]

トガンによれば、イディル・ウラル派は亡命後も密告や中傷に従事した。[108] トガンはそれらに応じずにいたが、やむなく文化交流や協力の可能性をＹＴで打ち出した。本稿では前者を取り上げたが、『砂中都市』でトガンはタタール人がバシキール人やトルキスタン人と協力しうることを強調している。特にトガンが注目したのは、綿花や灌漑農業などトルキスタンの経済的可能性である。彼はタタール人にトルキスタン、中でもカザフスタンへの移住を促すことで、ロシア人に対しトルコ系住民の人口密度を高めることを目指していた。[109]

このようにトガンはタタール人全体を敵視していたわけではない。親友でもある亡命タタール人アブドゥッラー・バッタル（一八八三‐一九六九）宛一九三五年六月三〇日付書簡でも、「小生は決してタタール人の敵ではありませんでした」と述べている。また彼は「小生の考えるところ、カザン人はトルコ民族の最も有能で腕の立つ部分であります」とタタール人のポテンシャルを評

価するが、「彼らは、彼らの現「指導者」「イスハキー」たちが彼らに示した誤った道を捨て去らねばならず、残り全てのトルコ人の精神的指導者、長兄になろうとする空想を絶たねばなりません」と説くように、イスハキー派に対しタタール・ヘゲモニーの放棄を訴えている。[10]

以上をまとめると、ロシア革命に端を発するトガンとイディル・ウラル派との対立は、トガンの文化観や連邦主義に影を落としたと言えるだろう。それらはＴＭＢ内における彼の正当性とも結びつくものであったため、トガンはイスハキーらの文化自治論を批判し続けたのである。

おわりに

本稿ではＹＴでの論文および関連史料を足掛かりとして、トガンの文化観やその障害となるイスハキーらとの対決を考察してきた。シャイバクの事例に見られるように、彼の是とする文化は日常生活やトルコ的慣習に根差し、彼自身の経験とも共通するものであった。またトガンはムハンマド・アミーンを文人君主として高く評価し、イディル沿岸地域とトルキスタンとの文化的交流の意義を強調した。

その反面、「独立タタール文明」や部族方言の台頭という文化的一体性を損ねる事態に対してトガンは強く反対している。それはロシア革命以来続くイスハキーらイディル・ウラル派との対決を反映していた。こうした背景を踏まえると、ＹＴにおけるトガンの論文が、ＴＭＢの理念である領域自治・連邦主義と結びついていたことをまず指摘できる。これらの議論はさらに、バシキール人はトルキスタン人に含まれるのか否かという問題にまで掘り下げることができよう。換言すればそれは、「民族・共和国境界画定」によって解体された地域概念としてのトルキスタンを、ＹＴを通じ再構築する試みであったとも言える。またＹＴ創刊に至るまでの経緯やトガン、チョカイの不平の申し立て先が示すように、ＴＭＢの活動やイスハキー派との対立がプロメテ連盟とのやり取りの中で進んだことも看過できない。従ってＹＴにおけるトガンの諸論文は、元革命家、亡命運動指導者、トルコ史研究者、そしてバシキール人という側面が複雑に絡みあい、ＴＭＢの立場と同時にトルキスタン人としての自身の正当性を主張する試みの産物であったと結論づけられよう。

一方で、本稿では論じる機会のなかったＹＴにおける

トガンの政治経済観（論文⑥・⑧・⑭など）や文字改革を巡る議論（論文⑰）を彼のトルキスタン観と結びつけることについては、今後の課題としたい。トガンやチョカイ、イスハキーら亡命者の大半はその後祖国帰還を果たすことなくその生涯を終える。従って、祖国との決定的な断絶によって彼らの描いた地域概念がどれほど現実から乖離したかも追究されねばならない。

結果的にトガンはイスハキー派[11]に加え、チョカイとも対立しＴＭＢを去った[12]。後者との対立については別稿で論じることとして、彼はＴＭＢにおいてバシキール人やタタール人を内包するトルキスタン人意識の創出に成功しなかった。しかし亡命者としての彼の生命がこれで終わったわけではない。一九三九年に帰国を果たしたトガンはトルコでの活動を再開するが、第二次世界大戦によってトルコ国内外の情勢は混迷を極めてゆく。その中で彼は「人種主義・トゥラン主義裁判事件」を通じ、独自の民族主義思想を形成していったのである。

註

（1）トルコ亡命以前における彼の経歴に関しては拙稿「オーレル・スタイン・ペーパーズから見るゼキ・ヴェリディ・トガンのトルコ史研究と歴史観」『日本中央アジア学会報』一〇号（二〇一四年）、一三三頁；Tuncer Baykara, *Zeki Velidi Togan*, Ankara, 1989, s. 1-16; aynı yazar, “Togan, Ahmet Zeki Velidi,” *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi* (*DİA*: http://www.islamansiklopedisi.info), c. 41, s. 209-210; Charles Hostler, *The Turks of Central Asia*, Westport, Conn., 1993, pp. 180-181 などを参照。

（2）二〇世紀後半以降の主要なトガン研究については Ahat Salihov, “Prof. Dr. Ahmet Zeki Velidi Togan’in Faaliyetlerini İnceleme Tarihinden,” A. Melek Özyetgin vs. (haz.), *Tarihten Bugüne Başkurtlar*, İstanbul, 2008, s. 19-24.

（3）М. Н. Фархшатов, Заки Валиди Тоган: жизнь и творчество в первый период эмиграции (1923-1948 гг.)（東洋文庫特別講演会二〇二二年二月二〇日）での発言。

（4）*С. М. Исхаков*. Ахмед-Закки Валидов// Вопросы *истории*. 2003 (10). стр. 147–159; *С. М. Исхаков*. Русские евразийцы и А. З. Валидов// Русский исторический сборник том, 4 (2012). стр. 262–268.

（5）*М. Н. Фархшатов*. «Работать на чужбине, творя на иноземных языках, даётся мне с большим трудом...» // *М. И. Роднов* (ред.) Река времени. Уфа. 2011. С. 83–101. http://www.oiru.org/images/stories/Library12042012/timeriver.pdf（最終アクセス：二〇一五年三月一日、以下同様）; Marsil N. Farkhshatov, “Ahmet-Zeki Validi Togan and the Travel Accounts of Ahmad ibn Fadlan,” *St.*

Petersburg Annual of Asian and African Studies, vol. 1 (2012), pp. 15-37.

(6) チョカイについてはAbdülvahap Kara, "Şokay, Mustafa," *DİA*, c. 39, s. 217-218 ほかにもaynı yazar, *Türkistan Ateşi*, İstanbul, 2002; Maria J. Çokayeva, *Mustafa Çokay'ın Hatıraları*, İstanbul, 2000 (1. basım: İstanbul, 1972); Bakhyt Sadykova, *Mustafa Tchokay dans le mouvement prométhéen*, Paris, 2007 など、多くの関連書籍が出版されている。なお本稿で言及するトルコ系の人物については小松久男ほか(編)『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、二〇〇五年の各項目も参照されたい。

(7) Ahat Andican, *Cedidizm'den Bağımsızlığa Hariçte Türkistan Mücadelesi*, İstanbul, 2003.

(8) 小松久男「中央アジアのムハージル」宮治美江子(編著)『中東・北アフリカのディアスポラ』明石書店、二〇一〇年、一〇二-一二五頁。

(9) Hostler, *ibid*., pp. 176-177; Mustafa Kaçalin, "İdilli, Muhammed Ayaz İshaki," *DİA*, c. 21, s. 474-476.

(10) 拙稿、前掲論文、一二一-一二二頁。

(11) バシキール自治運動の詳論については西山克典『ロシア革命と東方辺境地域』北海道大学図書刊行会、二〇〇二年、二四一-二三〇頁。

(12) Zeki Velidi Togan, *Türkili Haritası ve Ona ait İzahlar*, İstanbul, 1943, s. 16-17; aynı yazar, *Hatıralar*, 2. basım, Ankara, 1999 (1. basım: İstanbul, 1969), s. 182-183, 193-196, 275, 312-313, 318-321, 326-328, 381-382.

(13) Togan, *a.g.e*., s. 480-481, 498-499, 503-504; Andican, *a.g.e*. s. 219-233.

(14) レスールザーデとその亡命については、徳増克己「マンメド・アミン・ラスルザーデ著 改訳『あるトルコ民族主義者のスターリンと革命の回想』(その1)」『静岡文化芸術大学研究紀要』一〇号(二〇〇九年)、一七九-一八一頁; Hostler, *ibid*., pp. 178-179; Yavuz Akpınar, "Resulzâde, Mehmet Emin," *DİA*, c. 35, s. 2-5.

(15) Andican, *a.g.e*., s. 294.

(16) Andican, *a.g.e*., s. 296-302, 799-800.

(17) 先駆的な概論としてはRichard A. Woytak, "The Promethean Movement in Interwar Poland," *East European Quarterly*, vol. 18 no. 3 (1984), pp. 273-278があるが、近年ではRalph Schattkowsky, "Prometheismus und Osteuropaforschung in der Zweiten Polnischen Republik," *Zeitschrift für Ostmitteleuropa-Forschung*, Bd. 61 H. 4 (2012), S. 519-565; David X. Noack, "Die polnische Bewegung des Prometheismus im global-geschichtlichen Kontext 1918-1939," *Österreichische militärische Zeitschrift*, 2/2014, S. 187-192のようにドイツ語圏でも研究が公刊されている。

(18) 例えばRoman Smal Stocky, "The Struggle of the Subjugated Nations in the Soviet Union for Freedom," *Ukrainian Quarterly*, vol. 3 no. 4 (1947), pp. 324-334; Roman Smal-Stocki, *The Nationality Problem of the Soviet Union and Russian Communist Imperialism*, Milwaukee,

1952, pp. 158-163; George Nakashidse, “Professor Roman Smal-Stocki and the Promethean Movement,” *Ukrainian Quarterly*, vol. 25 no. 3 (1969), pp. 252-261; Stephen Dorril, *MI6*, New York, 2002, pp. 185-214.

(19) Timothy Snyder, *Sketches from a Secret War*, New Heaven, 2005.

(20) Hiroaki Kuromiya, Georges Mamoulia, “Anti-Russian and Anti-Soviet Subversion,” *Europe-Asia Studies*, vol. 61 no. 8 (2009), pp. 1422-1428, 1435-1436. バンマト個人文書は現在イスタンブルのIRCICA図書館に収められているが、筆者がトルコ留学中の二〇一一年に訪れた際には非公開とのことであった。同コレクションについては、http://library.ircica.org/default.aspx?@=Bammate

(21) Etienne Copeaux, Eriman Topbaş (çev.), “Promete Hareketi,” *Kırım*, S. 2 (1993), s. 11-20; Etienne Copeaux, “Prometeci Hareket,” Semih Vaner, *Unutkan Tarih*, İstanbul, 1997, s. 17-52.

(22) Ali Akış, *Aklımda Kalanlar*, Ankara, 2002, s. 27-30.

(23) Andican, *a.g.e.*, s. 242-248.

(24) Andican, *a.g.e.*, s. 249-253.

(25) Andican, *a.g.e.*, s. 253-255.

(26) Michał Kowalewski, “The Gigantic Struggle of the Modern Prometheus,” *Wschód*, N. 4 (1931), pp. 3-8; Tadeusz Radwański, “The Promethian [sic] Movement and the Potential War-strength of the U.S.S.R.,” *Wschód*, N. 24 (1936), pp. 6-9; J.R. “Polish Promethean Movement in the Past,” *Wschód*, N. 25-26 (1937), pp. 15-19; W. Bąnczkowski, “Promethean Matters,” *Wschód*, N. 27 (1938), pp. 6-9 など。

(27) Togan, *a.g.e.*, s. 476-477, 495-496.

(28) Andican, *a.g.e.*, s. 243; Snyder, *op.cit.*, p. 41. ステンポフスキについてはE. J. Czerwinski (ed.), *Dictionary of Polish Literature*, Westport, Conn., 1994, pp. 395-396; Łukasz Mikołajewski, “From Center to Province,” in Mark Hewitson, Matthew D’Auria (eds.), *Europe in Crisis*, New York, 2012, pp. 183-197.

(29) ホウフコの経歴については、Olgierd Górka, “A Word about the Late Thaddeus Hołówko,” *Wschód*, N. 7-8 (1932), pp. 5-12.

(30) Andican, *a.g.e.*, s. 296.

(31) Andican, *a.g.e.*, s. 296, 304-307, 894. ただしTMBの仇敵であるブハラ・アミールの代理のパリ来訪を連盟側が歓迎したため、両者の関係は加盟直後に悪化した。

(32) Andican, *a.g.e.*, s. 303-304

(33) Andican, *a.g.e.*, s. 302-303.

(34) Mecmua İdaresi, “İfade,” *Yeni Türkistan*, S. 1 (1927), s. 1-2.

(35) Andican, *a.g.e.*, s. 303.

(36) İmzasız [Togan], “Yeni Türkistan ve Ruslar,” *Yeni Türkistan*, S. 7 (1927), s. 2-7.

(37) 九月にはTMBの隠れ蓑として「トルキスタン・トルコ人青年同盟」が組織され、当局によって認可されている。Andican, *a.g.e.*, s. 308-311.

(38) 「ソクルカイ」は自身の属する支族名であり、後者は「愛するしもべ」程度の意味になろう。Togan, *a.g.e.*, s. 1-2, 5-6.

(39) Lowell Bezanis, "Soviet Muslim Emigrés in the Republic of Turkey," *Central Asian Survey*, vol. 13 no. 1 (1994), pp. 160-162. ベザニスは、後年ホジャエフが粛清された口実としてYTの閲読を挙げているが、本文で指摘したように、彼はTMBを警戒するためYTを独占的に閲覧する立場にあった。

(40) A. Ahat Andican, "Yurtdışındaki Türkistan Milli Hareketi'nin Sesi "*Yeni Türkistan*"," Tülay Duran (ed.), *Türkistan'ın Bağımsızlığına Hizmet Eden "Yeni Türkistan"dan Seçilmiş Makaleler*, İstanbul, 2005, s. 14.

(41) 帯谷知可「ロシア革命期の中央アジアにおける「トルキスタン」の政治的領域をめぐって」黒田卓ほか（編）『中央ユーラシアにおける民族文化と歴史像』東北大学東北アジア研究センター、二〇〇三年、七七－九四頁。

(42) Mecmua İdaresi, a.g.m., s. 1. なお小松、前掲論文、一一三－一一四頁はYT現代語訳から取られたものである。

(43) 小松久男『革命の中央アジア』東京大学出版会、一九九六年、二三三－二四七頁；帯谷、前掲論文、八七－八八頁。

(44) 帯谷知可「書評 Arne Haugen, *The Establishment of National Republics in Soviet Central Asia*」『アジア経済』四六巻一一・一二号（二〇〇五年）、一五六－一六〇頁；同「旧ソ連中央アジアの国境」岩下明裕（編著）『国境・誰がこの線を引いたのか』北海道大学出版会、二〇〇六年、六二－七二頁。

(45) 熊倉潤「民族自決の帝国」『国家学会雑誌』一二五巻一－二号（二〇一二）、四一－一〇四頁；同「民族自決と連邦制」『ロシア史研究』九四号（二〇一四）、三－二一頁。

(46) Togan, *a.g.e.*, s. 481; Andican, *a.g.e.*, s. 229-230.

(47) Andican, *a.g.e.*, s. 782-784.

(48) ソ連期の用法ではカザフスタンは除外された。

(49) Andican, *a.g.e.*, s. 277-279, 812, 817-818.

(50) 小松、前掲論文、一一四頁。

(51) この他に、無署名論文一点（論文a）も語彙の特徴から彼の作品である可能性が高い。

(52) テリー・マーチン、荒井幸康ほか（訳）『アファーマティヴ・アクションの帝国』明石書店、二〇一一年、一九－一〇六、一六四－二二七頁。

(53) K.M.F. [Köprülüzade, Mehmet Fuat], "Yeni Türkistan," *Türkiyat Mecmuası*, S. 2 (1928), s. 555.

(54) Ahmet Zeki Velidi, "Şaybak Han'in Şiirleri," *Yeni Türkistan*, S. 1 (1927), s. 22.

(55) Velidi, a.g.m., s. 23.

(56) ただしシャイバーニーはイスラム法を完全に無視したわけではない。相続時に被相続人の孫による代襲相続を認めるか否かの法学論争において、彼は「チンギス・ハーンのヤサ」をイスラム法に合致させることによってこれを認めさせようとしたが、代襲相続を認めない確た

る法的典拠が示されると自説を撤回している。磯貝健一「シャイバーニー・ハーンとウラマー達」『東洋史研究』五二巻三号（一九九三年）、三三一－六八頁。

(57) Velidi, a.g.m., s. 23.

(58) 以下本文中で［　］内に示した写本の葉数と行数は、Yakup Karasoy, *Şiban Han Dîvânı*, Ankara, 1998 に準じた。

(59) Velidi, a.g.m., s. 24.

(60) Togan, *a.g.e.*, s. 17-18; 小山浩一郎（訳）、山内昌之（訳注）「ゼキ・ヴェリディ・トガン自伝（3）」『史朋』六号（一九七七年）、一四－一五頁。彼の父が日常生活上の慣習を優先した逸話は他にもあるが本稿では割愛する。

(61) Velidi, a.g.m., s. 25.

(62) ただしミルク学者の足立達によると、ヘロドトスの記述（『歴史』四巻二節）からスキタイにも馬乳酒が存在したという日本やトルコで知られている説は、邦訳者松平千秋や彼以前のヨーロッパ人古典文献学者らの過剰解釈である可能性が高い。彼による批判と馬乳酒の歴史的展開については、足立達『乳製品の世界外史』東北大学出版会、二〇〇二年、四五六－四六五、五五一－五五五、九一九－九二一頁。なおバシキール共和国を含むユーラシア各地の現代の馬乳酒製造については、石井智美「ユーラシア地域における馬乳酒製造」『北海道民族学』一〇号（二〇一四年）、八七－九五頁。

(63) Togan, *a.g.e.*, s. 29, 57, 111, 195, 350, 376 vs.

(64) ロシア文化からの視点ではあるが、蜂蜜酒と馬乳酒にまつわる文化的表象については、沼野恭子「蜜酒は髭をつたわって流れてしまい……」『Ｖｅｓｔａ』八二号（二〇一二）、八－一二頁。

(65) Velidi, a.g.m., s. 24.

(66) 堀川徹「シャイバーニー・ハンとアルクーク城」『史林』六二巻六号（一九七九年）、三九－七一頁。

(67) Velidi, a.g.m., s. 23-24.

(68) ハキーム・アタと『バーキルガーンの書』については、Fuad Köprülü, *Türk Edebiyatı'nda İlk Mutasavıflar*, 5. basım, Ankara, 1984 (1. basım: İstanbul, 1918), s. 88-95, 172-174; Devin DeWeese, "Three Tales from the Central Asian 'Book of Hakīm Ata'," in John Renard (ed.), *Tales of God's Friends*, Berkley, 2009, pp. 121-135. トガンが私淑した改革派タタール知識人リザエッディン・ファフレッディン（一八五九－一九三六）も、幼少時の教育で用いた書物の一つにハキーム・アタの詩集『終末の時の書』を挙げている。磯貝真澄「19世紀後半ロシア帝国ヴォルガ・ウラル地域のマドラサ教育」『西南アジア研究』七六号（二〇一二年）、八－九頁。

(69) Togan, *a.g.e.*, s. 295-296.

(70) 引用文を含むバーブルのシャイバク批判については、間野英二『バーブル・ナーマ2』平凡社、二〇一四年、二三一－二三二頁。

(71) Velidi, a.g.m., s. 23.

(72) Zeki Velidi Togan, "Ali Şîr Nevaî," *Tasvîri Efkâr*, 11/2/1941; 15/2/1941; 23/2/1941; 4/3/1941; aynı yazar,

“Dr. Rıza Nur’a Cevap,” *Tasviri Efkâr*, 15/5/1941; aynı yazar, “Baysungur Mirza, Hayatı ve Eserleri,” *Gökbörü*, S. 1（1942）, s. 15; S. 2, s. 6.

（73） トガンのこの問題意識については別の機会で取り上げたい。

（74） Celil Güngör, “Bir Belge,” *TYB Akademi*, S. 12（2014）, s. 179-180.

（75） ムハンマド・アミーンの事績については、W. Barthold, A. Bennigsen, “Ḳāzān,” *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., vol. 4, p. 849; G. ヴェルナツキー、松木栄三（訳）『東西ロシアの黎明』風行社、一九九九年、九〇－九一、一〇〇－一〇一、一四一、一六四頁。

（76） Ahmet Zeki Velidi, *Türk ve Tatar Tarihi*, Kazan, 1912, s. 207-215.

（77） Ahmet Zeki Velidi, “Türkistan ve İdil Havzası’nın Medenî Münasebetleri Tarihinden,” *Yeni Türkistan*, S. 2-3（1927）, s. 25-26.

（78） Velidi, a.g.m., s. 27. この直前にトガンは［vk. 82a, 2］を「カザン・ハンの王座のためにḤān-ı Ḳazān taḫtı üçün」と読み、ハン位を追われていたムハンマド・アミーンの復辟とシャイバクによる領土的関心を結び付けるが、校訂版のように「双星の合するハンḤān-ı ḳırān」、即ちティムールを指すものと解釈するのが自然だろう。Karasoy, *a.g.e.*, s. 164, 505.

（79） Nuri Özcan, “Gulâm Şâdî,” *DİA*, c. 14, s. 186-187.

（80） 間野、前掲書、一六八－一六九頁。

（81） Togan, *a.g.e.*, s. 467.

（82） Velidi, a.g.m., s. 28.

（83） Velidi, a.g.m., aynı yerde.

（84） Ahmet-Zeki Valîdî, “Temür Bek’in İslâmiyete Bakışı,” *Atsız Mecmua*, S. 13（1932）, s. 9-10.

（85） Velidi, a.g.m., s. 29-30.

（86） トガンはトルキスタン衰退の原因を、海上交易や鉄道網の発達によりトルキスタンが中継交易地としての地位を失ったことに求めている。Soklıkayoğlu［Togan］, “Türkistan Meselesi,” *Yeni Türkistan*, S. 1（1927）, s. 2-3; S. 7, s. 3; Togan, *a.g.e.*, s. 67. 近年ではこうした変化は衰退ではなく、ロシアとの交易の増大という質的変容として捉えられている。小松、前掲書、一二七－一三〇頁。

（87） トガンはタール中継交易資本と「独立タール文明」の結びつきを一九世紀末に求めているが、その起源は一八世紀半ばにオレンブルク近郊に建設された商業都市カルガルを拠点にしたタール人商人層にまで遡ることができる。濱本真実『「聖なるロシア」のイスラーム』東京大学出版会、二〇〇九、二〇二－二二三頁。

（88） こうしたトガンの見解は正しいとは言い難い。一八世紀後半から二〇世紀初頭におけるタール人のトルキスタンへの進出と経済・文化面での活躍については、リナット・シガブディノフ、高橋巌根（訳・解説）「中央アジアのタール人 第1章」『流通経済大学社会学部論叢』二二巻二号（二〇一二年）、一九四－二〇五頁。

（89） Velidi, a.g.m., s. 30. この論文でトガンは、クリミア・

タタール人イスマイル・ガスプリンスキー（一八五一－一九一四）の新方式運動を評価していない。この運動の目的の一つはオスマン語に近い共通トルコ語の創出であったが、トガンはクリミアの凋落により媒介を失った西トルコ（オスマン）語・文明の「無理やりな継続」と評している。

(90) Sokullkayoğlu, a.g.m., S. 1, s. 3; S. 7, s. 4.

(91) Sokli Kai Ogli, "Le Problème du Turkestan," *Promé-thée*, No. 16 (1928), p. 17; Validi Ahmet=Zeki, "Das turkistanische Problem," *Deutsche Rundschau*, Jahr. 56 (1930), Apr., S. 25. 他の例としてAhmet Zeki Velidi, "Türk Dünyasında Elifba Meselesi," *Yeni Türkistan*, S. 10-11-12 (1928), s. 11.

(92) Ahmet Zeki Velidi, "Türkistan İsmi, Hududu ve Mesahası hakkında," *Yeni Türkistan*, S. 5-6 (1927), s. 34-35; Togan, *a.g.e.*, s. 194-195; 帯谷、「ロシア革命期の中央アジアにおける…」、八三－八六頁。

(93) 拙稿、前掲論文、二二頁。

(94) Andican, *a.g.e.*, 315-320.

(95) Bibliothèque universitaire des langues et civilisations (BULAC), *Archive de Mustafa Chokay Bey*, Carton 3, Dossier 3a, p. 84. なお本文で省略した論点は、②第一次世界大戦以来バシコルトスタンに逃れていた難民への選挙権付与の是非（一九二〇）、④民族主義雑誌『トルコ人の母国』を主宰したタタール人ユースフ・アクチュラ（一八七六－一九三五）によるトガン論文の掲載拒否（一九二八）であった。

(96) *С. М. Исхаков* (сост., пред. и прим.). Из истории российской эмиграции, М, 1999, стр. 64-65.

(97) *Archive de Mustafa Chokay Bey*, Carton 3, Dossier 2a, pp. 89, 91.

(98) Andican, *a.g.e.*, s. 325, 844-848. プロメテ連盟に加盟するトルコ系亡命組織による会派、通称「トルコ人戦線」の組織化と会合は一九七〇年代末まで断続的になされたことが確認できる。Ömer Özcan, "Sovyet Mahkûmu Türklerin Muhaceretteki Mücadelelerinden Bir Safha," *Türk Yurdu*, S. 187 (2003), s. 36-42; Ryosuke Ono, "Muhacerattaki bir Özbek Türkü'nün Mektuplarına göre Türk Dünyası," *Ankara Üniversitesi Dil ve Tarih-Coğrafya Fakültesi Dergisi*, c. 53 S. 2 (2013), s. 574-575.

(99) *Исхаков*. Там же. стр. 76.

(100) Togan, *a.g.e.*, s. 320-321.

(101) Togan, *a.g.e.*, s. 480-481.

(102) 拙稿、前掲論文、二九－三〇頁。

(103) 大会では四四六票対二七一票で領域自治派が勝利している。両者を巡る議論とその後の歴史的展開については山内昌之『スルタンガリエフの夢』岩波書店、二〇〇九年（初版 東京大学出版会、一九八六年）、一二九－一四六、一五八－一八五頁。

(104) Ahmet-Zeki Validi, *On Yedi Kumalı Şehri ve Sadri Maksudi Bey*, İstanbul, 1934, s. 8-11.

(105) Validi, *a.g.e.*, s. 12-13; Togan, *a.g.e.*, s. 176-178, 190-

194. イスハーコフがこの問題を一九二〇年初頭における赤軍内での議論とするのは誤り。*Исхаков*. Там же. стр. 67.

(106) Valîdi, *a.g.e.*, s. 22-23.

(107) Valîdi, *a.g.e.*, s. 16.

(108) Valîdi, *a.g.e.*, s. 14-15, 18-20. 具体的な衝突例は Togan, *a.g.e.*, s. 499-502, 504-505; *Исхаков*, Там же, стр. 54-56; *Исхаков*. Ахмед-Закки Валидов. стр. 149.

(109) Valîdi, *a.g.e.*, s. 28-29, 32-34.

(110) *Ахметзаки Валиди Тоган*, Не сочтите за пророчество, Уфа. 1998. стр. 163.

(111) トガンがイスハキーと和解を果たすのは、後者が亡くなる前年の一九五三年のことであった。Akış, *a.g.e.*, s. 97-98. この席でトガンは「我々二人も同じ時代を生きた人間であり、タタール人である」と述べ歩み寄っている。

(112) なお、YTはソ連との関係悪化を恐れたトルコ政府によって、一九三一年に停刊処分とされている。Andican, *a.g.e.*, s. 359-366.

※本稿は松下幸之助記念財団・松下幸之助国際スカラシップ（二〇一〇－一二年度）の成果の一部である。